

高橋啓窓

嫁が君猫人形に一目散  
飛び跳ねる孫の手を引き初詣  
母が摘む春七草の良き香り  
黒百合に託して告げる蝦夷の恋  
溪流やヤマベ飛び跳ね秋涼し  
山間の湯の香ほのぼの夕紅葉  
釧路川下りしカヌー秋夕焼け  
母が焼く秋刀魚待つ子らにぎやかに  
ひぐまつ待つか知床上る鮭の群  
知床や蝦夷海霧切れて雄姿みせ

お陰をもちまして、私は一昨年の三月末に日本電工を退任し、昭和三十八年富士製鉄入社以来四十四年間の会社生活を無事終えることが出来ました。

テニス、ゴルフ、デジカメ教室、旅行と自由な時間を楽しんでおりました所、家内が「啓窓さん、足腰を鍛えることも大事ですが、俳句などで頭の体操をされてはどうでしょうか」ということで、その年の七月に「東北大学鬼城句会」に参加させて頂きました。俳句は私にとりまして、ほとんど初めての出会いです。最近読んだ俳句に関する本の中に「俳句は自分の見た風景や、感じたこと、体験したこと、発見したことなどを言葉に表す詩の一種でもある」と解説されていました。鬼城句会のお陰で、旅行することが、今までよりもっと楽しくなりました。

この四月に家族と一諸に京都旅行に出かけました。桜が春爛漫と咲き誇っていました。仁和寺の桜を見て一句が浮かびました。

せせらぎに御室桜の花ふぶき

まだまだ、つたない俳句ですが、鬼城句会の皆様とご一諸に和気あいあい俳句を楽しんでまいりたいと考えています。

中野仲安

初春や故郷の山凜として  
春の野に萌え出づる草緑増す  
蠟梅や神戸の悪夢覚めやらず  
校庭をわがもの顔に舞ふつばめ  
夕立に軒先借りて傘借りぬ  
朝顔のつる軒先に迷ひけり  
人の世に迷ひ続けて鰯雲  
稲妻にをののき思ふ9・11

秋深し来し方道を思ひつつ  
山峡の夜のしじまに月凍る

〔雑感〕

この歳になって俳句をやるとは思ってもいなかかった。正に六十否七十の手習いである。学友達と会って酒を飲むだけでは能がない、少しは頭の体操でもと始めたこの会も良き指導者に恵まれたお陰で立派な会に育ったと思ってる。会が二十四回目を迎えるという事は、二ヶ月に一回であるから発会後四年になるわけである。早いものである。兼題を眺めながら句を作る苦労は相変わらずであるが、出来上がった句が会でどう評価されるか胸をときめかすのも楽しみの一つである。自分ではどうかと思っただけが高い評価を得たり、苦しみ、もがきながらこれはよく出来たと思っただけが一票も入らないなどという事はよく出来たと思っただけが一票も入らない。上達するためには多くの句を作ることだとは分かっているが、相変わらず次回のためには多くの句を作って終わりとしている自分が情けない。

平山越庵（隆一改め）

入会の詮議がくがく初燕  
競り合ふや早月尾根と雲の峰  
絵団扇や八尾の風を胸裡まで  
夕顔の大輪開き友和顔  
一立山一を常温で飲み魂送り  
玉座より飛蝗とびたつ草の国  
句の一つ出来ず暮れゆく西鶴忌  
神通川鳶の神楽や神の留守  
植木職の手仕舞ひの音日の短か  
愚管抄先まだ厚き寒日和

三日坊主の私が俳句を四年間も続けているのは東北大鬼城句会あればこそ。

最近ではテレビNHK俳句を毎週見、入選句を記録し、テキストにも目を通す。

隔月の兼題五句を作り、三時間の句会に臨み、帰ってノートを整理するなど通算すると相当の精進。

村上谿聲先生には、句作のいろはや句会のルールなどほとんど知らない私を、脱落しないよう辛抱強く俳句の世界に導き入れていただいた。互選に漏れた句も主宰撰で拾い上げていただく、おまけでも選ばれれば嬉しい、次回もまた頑張っているという気になる。

入会権のそれだろ、民法の講義を思い出すよなァと、法学部仲間ならではの句会は楽しい。リズムや詩情に溢れ、思弁と格調に満ちた会友の句を見るにつけ、せめてその足元にと、思うが前途程遠い、でも会のある限り続けようと思う。そして主宰の本復を希うこと切々。

松本貞風

花三分尊徳ひとり薪背負ふ  
春の日や覚えある子の靴の音  
湯女の碑の若葉にこもり名も知れず  
嫁に来し母は十七桐の花  
原爆忌妖しく点る骨の影  
身を晒す飛蝗の羽化は憚らず  
神の留守出雲駅伝神ばかり

捨て去りし古里は今お茶の花  
泥鰯掘る心も変はる世も変はる  
子規の里明治の雪もこんな雪

.....

弁慶氏発谿聲氏黙諾に始まった句会は、辞書と歳時記を離せぬ生涯学習の一つになった。投句も選句も迷うことが多い。主宰、会員の評、アドバイスには納得するばかりである。句会の度、療養中の先生の選や評の如何に一人思いを馳せる。スポーツ、科学、経済、未開世界の感動も対象に詠みたい。町の子供達と俳句で遊びたい。会の存続には、高齢化もあり自在性ある運営が基準となろう。

三浦三浦

友が逝き春一番が荒狂う  
麻雀の卓を囲みて春うらら  
草餅をほおぼりメタボ考える  
保津川に緑彩る桐の花  
心太すする口元愛らしい  
冷麦の色を争う子らの箸  
夕立に浴衣の裾をたくしあげ  
稲光夜空裂き分けいずこへか

秋深し夜食のうどんなつかしく  
丹沢が夕焼けに映える七五三

私が本句会に入会したのは二〇〇七年三月二三日で、所謂中途入会である。以前よりその存在を承知していた。飛び込むことを躊躇っていた。俳句に対する興味はかなり以前に、神保町を散策していた時、季語の冊子を購入した経緯があることから多少なりともその感があったとかがえる。

入会二年を経たが出席率も悪く句に進歩も見られない、ルールにも疎い不良会員の最たるものである。レッドカードをいつ出されるかとひやひやものである。それでも参加するのは、幹事をはじめ、参加各氏が親切にも迎え入れてくれ、各位の心情を反映した句に触れ、新たな気持ち齎してくれるからである。

私は出来るだけ易しい表現で素直に感じたことをあらわしてゆきたいと考えております。

最後に病に伏せられてリハビリに取り組む主宰に早期回復のエルをおくりたい。

武蔵弁慶

激動の年のシンボル嫁が君  
雪解の水のささやくひとりごと  
豪商の白壁朽ちて春の雨  
つばくらや古酒醸し出す蔵屋敷  
半夏生竹馬の友と雑魚寝して  
雲の峰天地有情の境地たり  
若き日の淡い心や萩の花

連山を望みて里の柿簾  
山紅葉山の匂ひの里にまで  
はつしもを長靴で踏む幼き日

.....

人生の第二ステージを何か知的な遊びをしようという趣旨でスタートした。  
始めは一年もつかと危惧したが、二十四回続いている。会が増すごとに内容が充実し会員がお互い学びあう喜びを共有するようになっていく。  
これは、メンバーがそれぞれ豊かな学識と経験を有しており、それが相乗効果となって高次元の集まりとなっていてからなのだろう。  
本句集は、未熟なものであるが病にある先生に読んでいただきたく纏めた次第である。大いに喜んでくれると信じている。  
本会は、東京の鬼城一派の一つの拠点としてさらに発展させていきたい。

合田三鬼堂（客員）

谿聲先生から、まだ人数が少ないので頭数にといわれ、東北大村上鬼城句会に参加させていたでいて、もう四年。いまでは同人も増え、私の居場所はないのだが、居心地がよいので、いまだ同席している。谿聲先生が病にたおれられてから、先生の復帰の日を待って、皆で会を守っている。優秀な同人たちである。  
この句会、谿聲先生の指導を受ける機会が多いので、私は兼題に実験的な句を出させてもらった。幸い、先生からいくつか評価して戴けたのだが、如雨露君からこれがアンタの句と一覽表をいただき、妻に見せたら、素直じゃないの苦言一言。拙句かつ意味不明句につき注釈付きでご披露させていたたく。

新年

若宮大路から人の波。はぐれた仲間を鶴岡八幡宮の休憩所で待つ。

静の舞このあたりかと初詣

正月飾りの歌舞伎座。正月は客も華やかである。

破魔矢手に鬚見ている棧敷かな

春

浜離宮庭園。ここも小さいが梅園がある。

浜離宮梅に誘われ都鳥

踏絵は古い季語。信者の心の葛藤を想い。

絵踏みして心閉ざせし遊女かな

夏

桐の花のよい香りが山いちめん漂うという。妻の故郷の景色。

みちのくの山澄みわたり桐の花

根岸・笹の雪にて

打ち水や豆腐献上の老舗かな

秋

浅草寺の秋。今土焼は窯元が一軒残っている。

奥山の紅葉に今戸の招き猫

市ヶ谷台、江戸時代、浄瑠璃坂の仇討ちというのがある。

鬼芒浄瑠璃坂の死闘跡

冬

東銀座・いわて銀河プラザ。三陸の魚など出店をだす。干し鮭を浜干しという。売り子も三陸の人なれば、尚のこと美味に感ず。

乾鮭に北の風みる銀座かな

国立劇場で三ヶ月かけて元禄忠臣蔵の通し上演があり、真山青果の時代への想いが伝わってくる。

元禄の科白悲しき冬芝居